

令和8年度 宇治市乳幼児教育・保育協働研修通信

みんなで創ろう!「こどもまんなか」研修

第9回開催 令和8年9月1日(火)

テーマ

「この支援でいいのでしょうか」

参加者内訳: 保育所(園)4名・幼稚園3名・認定こども園8名・小学校1名・療育施設2名

講師



◆京都教育大学

教育創生リージョナルセンター機構 総合教育臨床センター
講師

榊原 久直 先生



※ この研修通信は、研修での学びを広く共有するために、研修後の参加者の振り返りシートをもとに作成・発行しています。

園(校)内研修や日々の振り返りにご活用ください。

次回の研修へのご参加もお待ちしております。

ご質問等がございましたら、下記メールアドレスまでお気軽にお問い合わせください。

nyuyojicenter@city.uji.kyoto.jp





講演からの学び

講演の中で最も心に残ったこと(参加できなかった仲間にも知らせたいこと)



非認知能力を育むために必要なもの

- ・ 愛着関係や主体性は非認知能力を育むために、とても大切だと分かりました。



特性は子どもたちからのメッセージ・困っているサイン

- ・ 特性は子どもたちからのメッセージということを知ったので、何で困っているのか、どうしてほしかったのか気づけるようにしたい。
- ・ 子どもの感情や興奮が高ぶった時には「やめて」と止めるのではなく、まず「どうしたの?」と一言声をかけて、困っているサインを確認する。
- ・ こだわりなど特性が見えたら不安の証拠。一息つかせてあげることが大切
- ・ 子どもの特性が色濃く出ている時は、感情や興奮が高ぶっているSOSのサインとなっているかも知れないと考えるようにする。
- ・ 子どもたちの特性を少し立ち止まって見ること（受け手の心の状況での見え方、特性の裏にある子どもたちの気持ち）について持ち帰って支援に活かしたい。



動画・体験を通して、子どもの困りを知る

- ・ 実際に動画を見て体験したことで、どのようなことに困っているのかが、分かって良かった。
- ・ 子どもの気持ちを理解する動画での体験が、とても分かりやすく良かった。
- ・ 実際に不器用さを体験することで、子どもの気持ちがとても分かった。

※ 別添の講師資料、動画QRコードから体験していただけます!



子どもの視点

- ・ 「子どもの視点から物事を見る」という言葉



インクルーシブ

- ・ 一人ひとりの困りを皆のこととして考えることが良い!!



目標は肯定文にする

- ・ 「否定文の目標」は達成感を感じにくい。



保護者の心の回復

- ・ ちょっと笑える瞬間は、保護者の心の回復に繋がる。



グループ交流での気付き

グループ交流の中で最も心に残ったこと(参加できなかった仲間にも知らせたいこと)



悩んでいるのは自分だけではない・共感



- ・ 悩んでいるのは自分だけじゃない。皆、悩んで考えながら、日々子どもと関わっていることに、少し安心しました。
- ・ どのエピソードもそれぞれ「分かる」と共感し合えるものや部分があり、みんな同じ葛藤をもっていると思えたこと
- ・ 友だちに手がでてしまう子への対応で悩まれていることが多いのだと改めて思った。
- ・ どの園も配慮や支援が必要な子が、たくさんいることを知った。



別の視点・違うアプローチ



- ・ 同じ特性を持った子どものエピソードを交流して、自分では気付かなかった視点を知ることができた。
- ・ 自分では分からなかった違うアプローチの仕方を知ることができた。
- ・ 似ている悩みはあるけれど、子どもによって解決策や支援方法はかなり異なるため、いろんな案を出し合うことが大切
- ・ 他の園での支援方法だったり、考え方、アドバイスをもらい「こうしてみよう」と感じることができた。



子どもに合わせて、楽しめる内容に変える

- ・ 製作等が同じように出来ない子には、保護者に了解を取って楽しめる内容のものに変えたり、同じように出来ていなくても出来たところや成長したところを保護者に伝える。





助言からの学び

グループ交流後の講師の助言の中で、最も心に残ったこと
(参加できなかった仲間にも知らせたいこと)



落ち着いている時に支援する

- ・ レッドゾーンに入ると「戦う」・「逃げる」という行動になるのだと分かった。
- ・ 興奮がMAXの時より落ちついている時に、やりとりやアイテムを見ることが良い。



子どもの気持ちにはいつでも寄り添う

- ・ 気持ちにはいつでも寄り添うが、要求に対しては出来る範囲で良い。時には毅然とした態度で関わること、これをぶらさないことが安心、信頼に繋がる。
- ・ 危険なことはダメと言ってよい。不適切・虐待と言われることが増えている中、ダメと言って良いと言ってもらえて、安心した。



インクルーシブな教育・保育

- ・ 個別の支援を「あの子は怒られなくてずるい」となった時、なぜそのように思うのか、その子の背景を考える。
- ・ 支援をしている子の周りにいる子の背景も考える。
- ・ どうしても手のかかる子を優先視してしまう中で、「いいな」という子も、実は困っているかもという視点が良いと思った。
- ・ インクルーシブな教育・保育。特定の子だけではなく、『誰でも困った時は助ける』ということを子どもたちとも共有することが大切。



子どもの行動には、その子なりの思いや考えがある

- ・ 「行動にはその子なりの思いや考えがある」という言葉で、子ども一人ひとりがいろいろな考えをもって生活しているのだと感じました。



明日からの実践で活かしたいこと

研修での学びをどう現場に落とし込むか、参加者の皆さんの実践への意気込みをキーワード別にまとめました。

1. 「子どもに寄り添う」

- ★ 困っていたり、不安になったりしている子には、「どうしたの?」と声をかけ寄り添う。

2. 「子どもの行動を『困っているサイン』として受け止める」



- ★ 子どもが遊びの場面、製作の場面、いろいろな場面で出しているSOSがないか、子どもと関りながら気付けるようにする。
- ★ どうしてその行動をするのかを考えて、子どもを受け入れられるようにしていきたい。
- ★ すぐに止めるのではなく、子どもの視点に立ってまずは考えてみる。
- ★ 「なぜできないんだろう」という場面があった時、「～だからかもしれない」と違う視点で考えてみようと思う。

3. 「周りの子どもたちにも目を向ける」

- ★ 特性のある子ばかりに目を向けるのではなく、周りの子たちにも目を向け、困っていることがないか、気付きたい。

4. 「自分自身の関わりを見つめ直す」

- ★ 自分自身の関りを今一度見つめ直し、余裕を持って、ポジティブな関りをしていきたい！
- ★ 感情的になっている子にはレッドゾーンになっていないか考えたり、特性について色濃く出ている子には不安があるのかなと考えていきたい。

まとめ

今回の研修では、講義や動画による体験、そしてグループ交流を通して、「子どもの行動や特性は、困っているサイン（SOS）かもしれない」という視点を全員で共有できたことです。

また、「悩んでいるのは自分だけじゃない」という共感のなかから、支援が必要な子どもだけでなく、「その周りにいる子どもたちや、支援を受けていない子どもの背景にも目を向ける」というインクルーシブな環境づくりの重要性に多くの先生が気付かれていました。

明日へのヒント

【ヒント1】「やめて」の前に「どうしたの?」

興奮が高ぶった時、止めるのではなく、まず一言声をかけて困っているサインを確認する。

【ヒント2】「～かもしれない」の視点

「なぜできないのだろう」という場面では、子どもの視点に立って考えてみる。

【ヒント3】周りの子どもにも目を向ける

支援を必要とする子ども以外にも困っている子どもはいないか心を配る。

【ヒント4】気持ちには寄り添い、要求はできる範囲で

受容しつつも、できない時は言葉で伝え、危険な行動には毅然とした態度で接する等ぶらさない。

【ヒント5】「見捨てられた」と感じさせない配慮

気持ちを落ち着ける部屋に行く時には、必要に応じて一緒について行くという配慮をする。

【ヒント6】みんなで悩みを出し合う

解決策は異なるため、いろんな案を出し合うことが大切。

悩んでいるのは一人ではありませんよ。乳幼児教育・保育支援センターの園訪問支援事業もぜひご活用ください。ちょっと気になる子どもの手立てを専門職と一緒に考えましょう。